佐賀医科大学一般教育紀要
第20号（2001）p. 85-112

Ada : A Life and a Legacy 第一章の日本語訳
―Adaとその母―

外国語科目（英語）　池田豊子・十日市　健助

A Japanese Translation of Chapter 1 of *Ada: A Life and a Legacy* — *I Understand, Mamma*

TOYOKO IKEDA & KENSUKE TOKAICHI
Department of Foreign Languages (English)

Presented below is a Japanese translation of the first chapter "I Understand, Mamma" of *Ada: A life and a Legacy* (The MIT Press, Cambridge, MA, 1985; First paperback edition, 1987 adopted in the translation work) by Dorothy Stein.

The chapter describes in detail how Lady Byron, Ada's mother who exerted enormous influence upon her character, was brought up, married Lord Byron, gave birth to Ada and got separated from the poet. The life of this particular member of the Victorian Age peerage tells the reader a great deal about the marriage convention and the education and upbringing of their heirs, apparent or potential, in those days. It is of considerable interest that later in the chapter Stein characterizes Lady Byron, together with Florence Nightingale and a few other 19th century English women, as someone very successful *because* of her ill health; she (Stein) reasons that such condition of Lady Byron's exempted her from many chores otherwise expected of her, thereby enabling her to spend ample time on horizon-widening reading. And of some interest from the medical or nursing student's point of view, is the description of then fashionable phrenology and of medicinal and therapeutic practices at the time.

How Ada tried to free herself out of Lady Byron's all powerful sphere of influence, told in episodes, represents a classic instance of clash between two individuals with strong personalities. After all, mother-daughter conflict may well be an ever present theme in any given society.

第一章　「わかりました、ママ」

Byron 伯爵夫人（以下Lady Byronと表記する）の生涯において、結婚生活を捨てたことほど彼女らしいことはなかった。「別離」とよばれるようになった夫との離別は、何にも増して彼女の以後の人生を形づくり、方向づけることとなった。当時の彼女のおかれた個人的、社会的な状況のもとでは、地位、名誉、富、子供までありながら夫と離別することは、並大抵のことではなかった。

Byronの妻は、1792年Ralph Milbanke 卿夫妻の15年間の結婚生活後、ようやく望みが叶って生まれた娘であった。彼女はAnna Isabellaと名付けられAnnabellaと呼ばれた。母はWenworth家にJudith Noelとして生まれ、娘が誕生する頃には、実家の所領の主たる相続者となっていた。当時の法定相続人たるJudithの弟、Viscount Wenworthには嫡出子はなく、また以後嫡出子を持てる見込みも殆んどなかったからである。相続人を待望する期間が大変長

かったため、生まれてきた子が女の子であることが気に入らなかったのはWenworth卿だけで、1792年初めに姉に宛てて次のような手紙を書き送っている。「きっと甥に違いないと思っていました。あなたは女の子でも同じように嬉しいと言っていますが、この点については私がお祝いをいうことは自分を偽ることになります」と。何はともあれ、母性本能の強い母と、誇り高く娘に甘い父に溺愛された幼いAnnabellaは、いつも自分の思い通りになると信ずるに足るあらゆる理由があり、それは家庭の中だけにとどまらなかった。後にByronが形容したように、彼女は高貴な血筋に生まれ、Byronよりずっと由緒ある爵位の相続人となったのである。彼女の両親には負債があり、母親が相続することになっていた財産（結局はLady Byronのものとなる）は抵当に入っていたが、このようなことはよくあることで、賃貸料と収入が入ってくる限りは大した問題ではなかった。

19世紀初頭には、上流階級の青年 — 正式にはgentlemen（紳士）と呼ばれる — の大多数は、大学教育を受けるのがあたりまえであった。彼等のなかには、あまり学問もしないで試験にも合格できないまま何とか大学を卒業するものも多かったが、大学に通うことで、同じような文化的背景、社交上のつながりを得ることができた。というのも、当時は在学期間を満たしさえすれば学位を取得することが可能だったからである。彼等の将来の社会的、政治的、職業的生活にとって最も大切なのは、在学中に培った友人やその外の人とのつながりだったのである。勿論、学問の好きな者にとっても、その機会はあり学問の目標を手助けする貴族の仲間もいた。

女性の場合は、こうなるべきという決まった教育のあり方も、知性を磨く共通の機会もなく、若い女子の教育は、全く両親、特に母親の考え方次第であった。いわゆる「学識のある」女性になるためには特別な才能、並外れた献身、寛大で知的な両親を持っていることが不可欠であった。学問は、彼女達にとって常に気になる最も重要な結婚市場では全く価値のないものであったが、当人が気立てがよく、家柄もよく、持参金が十分にある場合には、学問が必ずしも不利なものにはならなかった。

上流階級の女子教育にともなう気紛れさは、*Pride and Prejudice* — Annabella Milbankeが自分が読んだ本の中で、最も現実にありそうな小説と述べている — のLady CatherineとElizabeth Bennetとの間に交わされた有名な書簡に印象的に描かれている。彼女は母に次のように書き送っている。「これは、小説家の常套手段に頼っていません。溺死、大火災、逃げる馬、ペットの小犬やオーム、メイドも婦人用帽子屋も、決闘も変装……もでてこないのです。泣けてくるような物語でもないのにとても興味深い小説です」と。

Annabellaは自説を曲げない決断力の持主であっただけでなく快活で早くから学問好きであった。彼女の母が書いた手紙を読むと、彼女がどこへ出かけても賞賛の的であったことがわかる。Judithがこの賞賛を求めたことは事実であるが、すべての証拠が彼女が実際に賞賛に値することを示している。彼女の読書は幅広く深く、ノートは、読書し思索し気づいた全てのことに対する真面目で哲学的、道徳的な記述で溢れている。彼女はとりわけ、知人あるいは知りたいと思っている人物の短い心理描写、すなわち「性格」を書くことに夢中になった。

興味深いことに、彼女の教育は、我々に当時の上流階級の若い女子の標準的なたしなみを示してくれるJane Austenの「小説」のそれとは違っていた。彼女は確かに、絵画、ダンスを習いはしたが、母や自分の娘(Ada)とは違って音楽には殆んど興味がもてなかったようだ。歴史、詩、文学を読み、フランス語、イタリア語、ラテン語、ギリシャ語を学んだ。しかし上品な女性の普通のあり方から最もそれていたのは、哲学、数学、科学に対する関心であった。後に彼女の娘が受け継ぐことになるのだが、より難解な学問に関しては、両親の友人であった数学者で、科学的なものを書く作家William Frendに傾倒していった。

Mr. Frend は Cambridge の聖職者であったが、正統派信仰をやめ、ユニテリアン派に改宗した。彼の風変わりではあるが自由な物の見方は、リベラルで思いやりのあるMilbanke家の人々の心に訴えかけ、後になってのAnnabellaとユニテリアン派や改革との関わりに影響を与えた。それは彼女の声高な宗教宣言と厳しい道徳観とは奇妙なほど不釣合いであった。Frendは、思春期の彼女に宛てた手紙では、自分自身と文通相手を三人称で呼ぶという茶化しているが堅苦しい手法を用いた。彼女が14才の時に受け取ったそのような一通の手紙は、「Mr. Frendは、様々な仕事のためMiss Milbankeからの手紙に気づかないことがとても心配です」と始まり、「ユークリッド第4巻の理解のし方には大変満足しました」と続けている。三年後には「4次の数列の和を求めるエレガントな解法は、大変気に入りました」と。実際の人生行事からの気晴らしとして始められた研究は、極めて余裕のあるペースで行われたとされており、彼女を「数学のメディア」とまでに大変誇張したのは、帳簿をつけるのにも苦労していたByronであった。

この数列の和の研究と平行して、17歳で世間に出た時から、彼女の人生行事への真剣で本格的な取り組みが始まった。後年Annabellaはその頃の自分を振り返って、学問好きで素朴に打ち込んでいた自分と嫌々ながら決別したと次のように述べている。「17才になった時、世間に出るのを延期したいと切実に思った。世間に対して良い感情は持ちあわせず、絵画、本の収集、詩作などがあまりにも楽しく他のことに時間を使いたくなかった。でも私にもその時がきてしまった」と。より最近の他の資料では、彼女は8才で初めてロンドンを訪れた時から、その興奮のため辛く引き裂かれた気持であったことを示唆している。19世紀においては、結婚を待つ良家の女子の生活は非常に制限されていたので、都会的な娯楽を追い求めたのは彼女一人ではなかった。しかし、Annabellaは、早くから、生涯にわたっての習性となる自己正当化や論理のねじまげの兆しを示していた。それは1812年初め、彼女の付添人であるべき病気の両親の元を離れ、彼女にとっての第三回めのロンドン行きを急ぐ目的を説明した時のことである。彼女は友人の Miss Montgomeryの健康がとても気になるので、ロンドンにいるこの友人を訪ねることは、自分だけでなく両親も安心させることができると説明したのである。両親の不承不承の出発許可を取りつけることは、彼女にとってある種の自己鍛練でもあったのだ。彼女は、物知り顔に次のように結論づけた。「多くを与えられているのに比べて、与えることが少ないのが私にとって自然なことなので、あなた方の申し出を拒否しないのは、私の断わるべきだという衝動に反するものである」と。

彼女のわきまえすぎた遠慮深い態度にもかかわらず、最初の3回にわたるロンドン社交期間に、Byron卿を含む数人からの結婚の申し込みがあった。彼女は現想的な夫像を作り上げていたので申し込みはすべて断わっていた。

19世紀初頭のロンドンは、金持で強い力を持った者が楽しめ、便利なように作り上げられていた。クリスマス休暇中は、金持階級は田舎の邸宅ですごし、その後、いわゆる“season”（社交期）はゆっくりと始まり、八月まで続き、その頃になるとテムズ川の悪臭がひどくなり、その年の鳥や獲物が田舎の奥深い場所で射止められるのを待っていた。シーズン中は、貴族は結婚適齢期の娘がいる場合は、ロンドンに邸宅、あるいは少なくとも滞在場所を持つものとされており、一旦ロンドンに上ると、絶え間なく次々と続く、幸福をもたらす実り多いパーティー、舞踏会、ディナー、演劇、音楽会に参加することが必要であった。

個人の邸宅、庭園での娯楽の他に、当節の名士に相まみえ、品定めを受けることのできる多くの公共の庭園、劇場、舞踏会場もあった。娯楽は現実的な社交的、経済的、さらに

多くなってきた政治的な取引き、即ち有利な結婚の取り決めをカモフラージュするのに役立った。この時代の風刺のきいた詩は、「商売」をいまだ軽蔑している社交界によくみられる薄いヴェールで半分隠された金もうけ主義を笑いものにしている。

既婚婦人達が夕食は少なくと口にする時は
“私達の他はごく少数の選ばれた友人だけ”
この言葉のほんとうの意味は、
“娘が私的な契約で売りに出されるのよ”

「御目付役の既婚婦人」(matrons)は結婚の成立に大きな役割と関心を持っていたが、上記の一節を引用したF.M.L.Thompsonは次のことを認めている。

結婚の際、重要な事柄が問われている時や不運に見舞われ邸宅の救済が問題となっている時は、結婚の取り決めは“matron”の手から離れる傾向にあった…。窮境が、没落した貴族に資産のある花嫁を求めさせた。土地つきの邸宅を相続する女性と結婚することが最も望ましい解決策であった…。しかし、没落しかけた貴族階級と富を結びつけようという人は、階級が余程ランクアップでもしない限りは、常に見つかるとは限らなかった。Sefton卿のアドヴァイザーは40,000ポンドの負債をなくす方法を詳細に調べて、相続人Molyneux卿の結婚の可能性にたどりついた。育ちは良いが財産がわずかか皆無に等しいLadyとの結婚は、財産を失うことになってしまう。彼の身分からすれば60,000ポンド以上の持参金つきのLadyを迎える権利がある…。数多くの富裕な銀行家達が、娘の身分と品位を高めるために、娘に富を喜んで差し出すだろう。

ここで示されている考え方は、農村であれ都市であれ、地代による収入は、銀行、商業、工業からだけの収益よりも社会的に高いものであるという依然としてある見方を示すと同時に、地位とお金が相互に換算しうるものであることを示している。それにもかかわらず相続された土地が、その土地に埋蔵されていた石炭や鉱物、また鉄道の拡張で価値が上がり収入が加算されたとしても、社会的地位がこの加算された富を享受することによって損なわれることはなかった。しかし、女性達 —— 女性相続人であれ寡婦であれ —— を支えるお金は、通常、彼女たちの管財人によって公債証券のような安全性の高いものに投資されたため、比較的低い利益しか得られない傾向にあった。引用した一節は、また、婚期に達した女性の願いは父親の願いをそのまま反映したものであり、女性相続人でさえも、一族が取引をしている銀行家の助言に耳を傾けるのが賢明だという殆んど普遍的な前提を表わしている。

理論的には、若い貴婦人は、結婚相手としてふさわしい男性の結婚申し込みを承諾しようと拒否しようと自由であったが、実際には、女性の交際範囲は世間に出る前は家族と家族の友人達に厳密に限定され、その後も御目付役の既婚婦人や後援者によって主催される行事に参加を許された人達に限られていた。このような状況のもとでは、女性達は夫となる見込みのある男性の申し出を承諾すべきか断わるべきかの判断の独自性は殆んど持てなかった。男性は時として女性以上に独自性を持たなかったのだが、物事が殆んど知らされないのは、知らされるべき事があまりないのだという前提を信じこんでいた。彼の最良の友人によると、Byronは、Miss Milbankeは金持で感じがよく「純粋そのものだ」と信じて選んだのだった。どのカップルも結婚の際、親戚でもない限りは、お互いのことを全くといっていいほど知らなかった。（Miss Milbankeと将来の夫となる青年が、生活していた小さな選ばれた付き合いの範囲内では、いとこ同士の結婚はあたりまえのことであり是認されて

いた。それは両家の富を守るのに役立ったからであり、その危険性はあまり認識されていなかった。）

貴族の邸宅や御目付役の既婚婦人(matron)による集まりに、出入りを許された男性達は、彼らの宗教や階級的出身によって注意深く審査されていた。また有力な女主人の、政治的な好みにより招待客リストを作る傾向もあった。貴族は称号をもっていれば上院では殆んど自動的に議席をえたが、貴族の相続人や息子達の下院への参入は、大地主によって保持されている地元の選挙区を支配すればスムーズに行なうことができた。時代が進むにつれ、社交生活での政治的側面は重要さを増した。大地主の直接支配が衰退するにつれ、野心的な中産階級の男達は、議員になりたいという願望への財政的な援助が可能な女相続人を探し求めるようになった。

結婚の申し込みがなされ、両家の関係者により承諾されると、弁護士、後見人、保証人などの第三者がいわゆる「夫婦財産契約」（marriage settlement）といわれる財政的合意を取り付けることがなされる。このプロセスは、花嫁の後見人や花嫁・花婿が相続を希望している財産のその時点での所有者の満足を得てはじめて完了し、保証人が両者の利益を守るために任命されてはじめて、結婚を祝うことができる。細部が終了するには時として何ヶ月もかかるが、結婚時、夫婦の死亡時、子供達の結婚時、成年時にそれぞれどのくらいの金額が譲与されるかについての相場は決まっていた。

再びJane Austenの小説は、このような事について何ヶ所か言及している。例えば、*Mansfield Park* の冒頭では、「Miss Maria Ward of Huntingdonは、たった7,000ポンドで幸運にもThomas Bertram卿の心をとらえた…そして彼女の弁護士である伯父は、正当な要求額に、彼女は、少なくとも3,000ポンド不足していることを認めた」とある。Thompsonはこれらのガイドラインをさらに次のように特定している。貴族社会では対等の立場にある者同士の結婚では、10,000～30,000ポンドの相続分が普通であり、花嫁は少なくとも10%の寡婦給与財産を将来受け取れる。ここでいう「相続分」は、娘及び長男以外の息子が、家の資産から譲与されるか、相続することができる金額であった。最も大きな相続分は長男のために確保されていた。娘は通常、結婚時に自分の相続分を受け取り ―― 実は娘の夫が受け取ったのだが ―― 長男以外の息子は専門職を目指すか何かの職に就いた時受け取っていた。

もし娘が結婚しなかった場合は、相続分は父親の死後、彼女の生活を支えるために使われた。さらに一般的なケースとして、相続分が花嫁の持参金になった場合は、“pin money”（父親が娘に与える小遣い銭）として知られる一年毎の手当てを、夫の存命中受け取ることができ、これは通常数百ポンド、又は持参金の1%であり、好きなように使うことができた。夫の死後は、「寡婦給与財産」(jointure)という夫の資産からの収入を生涯受け取ることができた。娘の持参金は、名門の出の女性が結婚後もその家柄にふさわしい生活を維持できるようにという意図で掛けられた一種の保険、あるいは投資として考えられていた。

通常、投資の収益は高い投機性をもつもの以外は5%位であったため、期待される寡婦給与財産10%を調達するために、妻が自分と同じかより高い家柄出の場合、未亡人の生活を維持するために資産を抵当に入れねばならず、それがしばしば相続人にとっては大変頭の痛いこととなった。貴族数人の未亡人のサポートを課されている資産は、一人の放蕩当主の債務を課されている資産に比べて大変な重荷を背負っているとみなされていた。一方、妻の小遣い銭（pin money）は通常の投資の利益よりは少額であったが、自由裁量がきくお金であり他にも生活費を受け取ることができた。実際は小遣い銭が何のために使われたかについては曖昧さもあるが、持参金の多い婦人で、放蕩な夫が彼女の財産を使い尽くし彼女を捨てた後も、保証人に守られたpin moneyで自分と子供達の生活を維持することを余儀

なくされた人が少なくなかった。幸いにも貴族の父親が娘に与える小遣い銭数百ポンドは、多くの場合、中産階級の一家の収入とほぼ同額であった。

このような結果を示す典型的な例は、Catherine Byronである。彼女は詩人Byronの母で、1785年20,000ポンドをはるかに超える持参金つきで嫁いだが、1790年に夫が彼女のもとを去った後は、貴族としての体面を維持しながら、年間150ポンドで息子を養育しなければならなかった。しかし、その後の8年間のうち少なくとも何年間かは、夫のために借りたローンの利子を払いながら150ポンド以下で生計を立てていた。しかも1798年にByronが10才で貴族の称号と財産を相続した時、彼女は自分の財政的なトラブルはほんの始まったばかりであることに気づいた。

16世紀以来、郷紳（gentry）を形成していた貴族とその他の大地主にとっては、重要な財産の正当な不動産相続を、「厳格な財産贈与」（strict settlement）といわれる法律手段によって安全なものとすることが習慣となっていた。これは結婚財産贈与ともよばれた。花婿の家の家長、通常は父親が、結婚を自分の相続人（息子）に条件をつけるのに都合の良い機会だと考えていたからであり、条件をつけなければ、息子は好きな時に全財産を売却したり譲渡したりする自由を持っていたからである。法律上、土地は限嗣相続で三代以内しか固定させることができなかったため、それぞれの代で定めなおすことが行われるようになった。一般的には結婚することになった相続人は、将来自分のものとなる財産が生まれてくると予想される長男へと渡ることに同意することは大変な幸せであり、将来のいくつかの自由とひきかえにしても、父親存命中に十分な収入の保証が得られれば大満足であった。花婿側の結婚財産贈与にあたる厳密な財産贈与の取り決めはさらに重要となる。それは18世紀から19世紀初めにかけて英国の農業システムが根本的な変化をとげ、結果的に小さいけれども裕福で有力な地主階級が、より大きくより統合された地所を所有するという現象を引き起こしたからである。

Byronが10才の時相続した世襲財産は父のものではなく大伯父のものであった。このByron卿は“the Wicked Lord”（悪殿さま）として知られ、猟の獲物についての口論で隣人や親族を殺した罪を上院で裁かれたことからこのように呼ばれた。多くのByron家の人々と同様、the Wicked Lordは若い頃には無謀に金銭を浪費した。彼は、（法律上相続人が限定されているので売ることは違法であった）自分の土地を、息子の結婚に反対して息子を困らせるだけのために、故意に奪いその一部を売却した。その息子は1776年に死亡、その相続人である息子も1794年に死亡、この不幸続きの一族の最終的な相続人は、将来詩人となるByronで、彼は相続人限定のない財産を相続したが、借金と訴訟の重荷を背負うことになったのである。

Byronの母は、スコットランド貴族の出身であったため、イングランドの貴族より幾分身分が低いとされていた。彼女は、息子の問題を監督するために正式に任命されていた後見人を含めて、息子の父方の親戚から無視されていた。非常に仕事が遅く、おそらく金で動く一人の弁護士を除いては、彼女は独力で、負債のある財産と不当に分割された土地への訴訟の対処を学ばねばならなかった。Mrs. Byronは大変な節約家であったが、母も子も、特に息子の方が熱心であったのだが、実際に困窮しているかどうかには関係なく、貴族階級にふさわしい体面を保つためには気前よく振舞った。体面とは上質な衣服だけでなく、最小限の召使い（男女とも）、馬車、十分な数の馬、不意の出費にすぐ対応できるだけのポケットマネーの準備、勘定書に無頓着な態度などのことである。賭事にかかった費用以外は、商人達のつけ・職人の手間賃も借金もすぐに支払う必要はなかった。Byronがこの紳士としての名誉ある様式にこだわった結果、彼が成年に達した時には深刻な借金状態に陥っており、それ以後も借金は増え続けた。

彼の弁護士達の解決策は地所の売却であったが、最初はこれにはByronは気乗りがしなかった。鉱床、採石場に恵まれたものの係争中の土地が再入手できるという期待が目の前にちらつき、すぐに行動をおこすとか節約することの必要性を鈍らせた。しかしByronは土地が生み出す収入以外は、財産にはあまり関心がなかった。訴訟は、結局、決着しないまま、問題の土地は彼の死の数ヶ月前に（期待していたよりもずっと安く）合法的に売却された。

Byronが20代前半の頃、母のとった解決策は、Sefton卿のアドヴァイザーの助言に立ち戻ることであった。即ち、Byronは、200,000ポンドか300,000ポンドの持参金のある女性と結婚するという、おなじみの常套手段によって財産をたてなおすべきだということであった。彼女（母）はこの習慣が自分にもたらした結婚による不幸を忘れていた。Byron自身の成年に達した時の最初の解決策は、もっとお金を借り、英国紳士が自分の家の女中を思いのままにするという特権をはるかに超える冒険と自由のある地中海への長旅に出かけ、債権者から逃れることであった。彼はギリシャ以東に行くことはなかったが、ギリシャでは当時のイングランドでは死罪にも相当する無軌道な交遊を楽しんだ。

放浪や、男女両性との浮かれ騒ぎの二年間で、Byronの借りたお金は底をついた。彼は、借金を返済するだけでなく、上院での政治的キャリアを積むつもりでイングランドに帰った。彼の称号により上院入りが認められ、演劇的な才能と素質が成功の前兆を示しているように思われた。またその後すぐ、彼の旅をロマンティックに綴った *Child Harold's Pilgrimage* の最初の２章がみるみるうちに有名になった。彼の名声、若さ、美貌、貴族という魅力は、おそらく彼の借金、生まれつきの右足の障害、一族の醜聞性を憂鬱に装っている姿によって一層強められたと思われる。彼はまた、自分の「犯罪」を示唆するようなことを、時折うっかり漏らしてしまうこともあった。Miss Milbankeが母に報告したように、これらの事すべてが、彼を1812年の男女交際のあきあきするほど退屈な時間に活気を与える「時代の寵児」にさせた。

Byronは、未来の娘Adaと（彼女の場合はそれほど極端ではなかったが）気分の振幅が大きいという性格を共有していた。何かの興味や活動に対してしばらくの間は非常に熱心に我を忘れて向かうが、全く突然に、それまで魅力的に思えたことに嫌気がさし退屈して投げ出すという性格である。そして彼は深い鬱状態になることが常であった。このよい例が上院での活動である。彼はケンブリッジの頃からずっとホイッグ党（自由党の前身）の党員であり、1812年2月27日に上院で行った処女演説の際には、ホイッグ党の指導者、Holland卿に相談して演題を選んだ。それは、「靴下編み機」という労働力を節減する機械による解雇に反対するNottinghamの靴下工場の労働者を擁護するものであった。この抗議運動は時に破壊的になり機械を壊したりしたため、そのような行動は死罪とする法案が導入された。Byronの演説は気が利いていて思いやりがあり大成功であった。演説の過激さにもかかわらず、その法案は修正を経て通過した。2回目の演説はもう一つの自由運動であるカトリック解放に賛成するもので、演説はあと一度だけであった。ほどなくして上院にも幻滅を感じるようになり出席することも止めてしまった。

彼の時間と集中力は、新しい社交的、性的な成功、そして負債の解決に使われた。財政的な負担を解消し、貴族の標準からするとあまり多くないが、確実な収入を確保するために邸を売却しようかという気になった。しかし、なぜ彼は結婚して一挙に財産と品性を修復しようとしなかったのだろうか。彼がどんなに魅力があったとしても、それはそんなに単純なことではなかった。今や、自由奔放に気をひくように身を投げ出してくる女性は既婚者ばかりであった。未婚の女性はずっと控えめにすることが要求されており、Byronは自ら女性を追い求めることにおいては驚くほど消極的であった。

19世紀の初頭においては、貴族階級の既婚女性の性的自由は確実に損なわれてきていた。

Byronの若い頃には上流階級の女性は、一旦結婚すると、その社会階層の中では相当な自由が認められていた。この変化がもたらされたのは、ヴィクトリア女王とお堅い女王の夫の影響と模範によってではなく、またその前のアデレード王妃の厳しい宗教性によるものでもなく、新興成金が強い政治力を持つ階級へと同化していくことをコントロールし制限することが望ましいと認識されたからであった。19世紀初めには、その規模が大きくなったためと、資格を主張する者の数が増加したために、エリート層は、お互いに気心の知れたを地所持ちの郷紳が、以前の内輪の政治支配が優れていて揺るぎないものであると思っていた時よりも、ずっと形式的で堅苦しく規則に縛られたエリート社会になった。産業革命による新興富裕階級は認められるべきであったが、それは、エリート社会の権威者が定めた基準を十分に受け入れてから徐々に承認されることになっていた。階級編成のこの過程で、女性達は自らの振舞と他人を非難することによって、規則を作り上げ維持するのに重要な役割を果たした。

従来の伝統的な財政や公的な仕事が次第に奪われていったため、19世紀の上流婦人達は、自分の家柄や個人的な行動によって、自分の属する婚姻グループのアイデンティティを規定し守るという女性に欠くことのできない機能を果たすことだけを、ますます要求されるようになった。このようにして、Annabellaは付き添いがなければ公の場に出ることもできないのに、彼女の母は父親の選挙運動を積極的に行ない、父の代理で演説さえしていた。彼女の父の姉Lady Melbourneは重要なホイッグ党の女主人で、彼女の不貞は広く知られていたが、その話は貴族階級だけにとどめられていた。離婚し未亡人となったAnnabellaはLady Byronとして自力で財産を管理し実験的な学校を作り、慈善団体を作った。彼女の娘は、才気があり名門の出であったが、既婚女性としては自分の財産も夫の財産も管理することができなかったし、友人、親戚の親しい仲間うちの外で自分の名前が人の口にのぼることのないよう最大の注意を払わなければならなかった。

Annabellaの伯母、Lady MelbourneはByronに教養を身につけさせた夫人達の中でも、最も魅力的で相性のよい一人であった。彼女はByronに「友情」を断固として教えるといったが、彼女はまた、スキャンダルになりかねないほどの奔放さでByronに夢中になったもう一人の若い既婚女性 Lady Caroline Lambの義母でもあった。Lady Melbourneは、彼女の姪にプロポーズするようByronに勧めてこの危機を避けようとしたが、Byronは申し込みを伝える仲人として伯母を使うというあまりにもいいかげんなやり方を使ったので、Annabellaはそれを見抜いて拒絶した。その後、かつての上院でのようにエリート社会に疲れうんざりしたByronは邸の問題と負債が解決するとすぐに、再び外遊の準備を始めた。

外遊を待つ間、Byronが自分の義姉Augusta Leighも含めて何人かの女性と気安くつきあうので、Annabellaは彼の申し出を断わったことを後悔し始めた。彼の代理人からの申し出を拒絶して一年もしないうちに、彼女は大胆にも自分からByronとの文通を始めたのであった。これは、彼女がどんな口実をつけたとしても、きわめて不適切なことであった。婚約前の男女が文通をするとか、ファーストネームで呼び合うなど考えられないことであった。（ファーストネームで呼ぶ親密な関係にない夫婦もあり、Lady Byronも妻であっても決して夫をファーストネームで呼べない立場の一人であった。）しかもAnnabellaは同時に友人Miss Montgomeryの兄である、もう一人の若い独身男性にも手紙を出していたのだ。

いつもなら自制心が強く上品な女性——彼女に結婚申し込みを断わられた別の求婚者の母からは“氷の柱”と呼ばれていた——からの申し入れを受けることに、おそらく好奇心をそそられたのであろう、Byronはこの申し入れに応じた。極秘の文通は一年以上も続いた。しかし、これは全くの秘密のやりとりというわけではなかった。Annabellaの性急な想いに対して、ByronはLady Melbourneと話し合っていたし、Annabellaにも腹心の友がいた。彼は、

Lady Carolineとの駆落ちの時と同様に、その危険性を強く警告されていたにもかかわらず、Augustaへのつのる性愛的な愛着についてもLady Melbourneに相談していた。英国では、近親相姦は1906年までは実際には罪ではなかったが、世間の不利な注目や社会的な非難は法的処罰よりも恐るべき罰であり、とりわけ女性達、その中でも特に宮廷での特権的な地位や収入を失いかねないAugustaのような女性達にとっては恐るべきものであった。

長い間、ByronはAnnabellaが何度もそれとなく愛を告白してくるのを無視していたが、ついにAugustaまでもByronに早く結婚するようにと強く促すようになった。Augustaが真っ先に選んだ相手は（それは彼の選択でもあったが）彼女の良き友人で姻戚関係にあったLady Charlotte Leveson-Gowerであった。Lady Charlotteの両親は娘には別の相手を考えていたため、この申し込みは断わられ、Byronはこれに代わるものとしてMiss Milbankeに二度目の求婚をした。彼が後見人達よりも裕福な若い女性達の心を捉えたのは明らかであったが、Annabellaは以前から両親の意志を強引に自分の思いに従わせていた。二度目の申し込みも一度目と同じように熱心なものではなかったのだが ―― 彼はその時も、断わられたら友人と外遊しようと陽気に計画していた ―― 彼女は即座に承諾した。

その後の数ヶ月間は、例の仕事の遅い弁護士が結婚契約の文書作成の仕事に時間をかけているということもあり、殆んど知らない（それに全く性格も異なる）女性との結婚の見通しへのByronの不安は募るばかりであった。お互いをよく知ろうと計画された訪問は延期されたあげく、ようやく実現したが結果はさんざんなものであった。Milbanke家の人々は彼を退屈させたが、Byronは若い結婚相手とは親しくなりすぎた。彼女は貞操の危機を感じて、すぐに訪問を短縮し彼に退去を命じた。しかし彼は不安を感じていたにもかかわらず、結婚を遂行すべきだという当時広く行われていた儀礼に縛られていた。というのは、婚約破棄は女性の特権であったからである。さらに、彼の邸の売却の話は進められていたが失速し、買い手は最初の頭金25,000ポンド以上を払うことができず、依然として結婚そのものが都合のよいものに思われた。仮に、新妻が彼の負債を軽減するほどに夫を家庭になじませることができないとしても、彼女は後継者を産むことができるであろうし、彼は夫に許されている自由を享受することができるであろう。最悪の場合でも、彼は常に旅行に出ることはできる。

結婚の取り決めにおいては、彼は寛大であろうとした。さもなければ、Milbanke家の弁護士が強気な取引にでるだろうと思われたからである。Annabellaの持参金は20,000ポンドで、そのうちの16,000ポンドは彼女の娘の持参金の一部に、または長子以外の息子の分与産となるはずであった。これはすべてごくあたり前のことであった。しかし彼は自分の財産の60,000ポンドからの収入を妻の寡婦給与とすることに同意し、この額は彼の顧問が正当だと考えた額を10,000ポンドも上回っていた。さらに、彼は、彼女の父や伯父が同時に彼女に与える財産を取り決めてほしいという主張もしなかった。たしかに、あまり危険を孕んでいるような状況ではなかった。彼女は一人子で両親が自由に遺すことのできるもの全ての受取人であることは明白であり、彼女の母は伯父の財産の大半を受け取る立場にあった。Annabellaの父そのものは、贅沢な遊興と政治活動の費用のため、かなりな負債を負っていた。（彼は貴族ではなく準男爵であったため下院選挙のキャンペーンをしなければならなかった。）結果的に、彼女の持参金の大部分はByronの生きている間には支払われなかった。その代わり、Ralph卿が、借りになっている額の利息を義理の息子に支払い、その大半は結婚の取り決めの一部であったpin moneyという形でAnnabellaに与えられた。女性相続人との結婚は負債のすばやい解決とはならないことを証明する結果となった。

歴史家たちは総じて、彼女の結婚そのものが悲惨なのだと最初からみなしてきた。彼らは結婚している状態は本来幸せなものだと信じたがる感傷的な人達なのだ。しかし結局は

双方とも結婚しなかったら決して手に入れることができなかったものを獲得している。Byronはしばしば結婚については軽蔑的に語っている。彼は女性と食事を共にすることも、夜を過ごすことも好きではなかったし、結婚が通常意味する長期にわたる同居を、全く嫌っていた。彼が好んだのは、完全に何も要求しないで一緒にいる時には彼の好みに快く合わせてくれる女性達だけであった。別居後、再び外遊する自由を得たが、法律的には結婚していたのでもう女性関係者からの申し込みも含めて、結婚への誘いや期待はなかった。また罪の意識にもはや悩まされることもなかった。もう十分に罰せられたと感じていたのだ。

Lady Byronは幼少の頃から自分流に生きることに慣れていたが、成人した女性として、自分の財産と肩書きがある寡婦という状況においては勿論のこと、他のいかなる状況においても、家庭の外ばかりか家庭内においても全てを支配したいという自分の好みを、子供だけの支配で満足させることになろうとは予想もしなかった。Byronの死ぬ前でさえ、自分に悩める聖女という役割を与えた別居は、彼女に未亡人としての多くの特権をもたらした。まるで舞台の向こう側から出てくるためには結婚という道を通りぬけなければならないかのようであった。

しかし、しばらくの間は二人ともこれ以上ないという程惨めであった。夫としてのByronの振舞はあまりにもひどく、妻は夫は気が狂っているのだと考えるようになり、Byronの激情の爆発を何回か目撃したAugustaも、この点にはすぐさま同意を示した。しかしAnnabellaが去った時、彼はショックを受け激怒した。たしかに彼は最初から別居を口にしてはいたが、実際そうするかどうかは別にして、自分が別居の時機と状況を設定するのだと考えていたからであった。別居は気も動転するできごとであり、彼女の突然の逃避は子供の誕生前から用意周到にひそかに準備されていたのだった。

もし子供が息子であったら、疑いもなくByronは親権の確保のために、もっと激しく戦ったであろう。女の子で少しは楽でありはしたものの、夫のもとを去り、娘を引き取ったAnnabellaは法律的にも社会的にも困難な戦野をくぐり抜けていかなければならなかった。19世紀後半におこったことながら、他の二つの有名な結婚の悲劇が、彼女の直面したことを如実に物語っている。明らかに、いずれの場合も夫の側の性的逸脱に関係していた。

第一は、John Ruskins夫妻の悲劇である。Effieの実家への逃避はAnnabellaの場合と同様、気をつかってひそかに計画された。Ruskinsは性的に不能であり、Effieは6年間の結婚生活後も処女であることを立証し婚姻の無効が認められた。にもかかわらず、彼女の行動は轟々たる非難を浴び、彼女は自分の置かれた立場に感謝すべきであったとほのめかす貴婦人達もいた。Effieは離婚のほんとうの理由は夫の薄情にあると主張したが、法律では薄情さを離婚理由としては認めなかった。さらに、彼女の社会的立場も影響を受けた。Victoria女王は40年間も彼女に会うことを拒否した。最後には女王の態度も少し和らぎ、死の床にいた彼女の二番目の夫、Royal Academy会長であったJohn Millaisへの好意として会うことに同意した。

第二のケースは結婚して貴族になったが夫が名うての同性愛者であったVirginia Woolfの遠縁にあたる女性についてのものであった。Woolfの伝記作家によると「Henry卿はイタリアに逃避し、ミケランジェロのような若い男性達のいる地でその後ずっとしあわせに暮らした。彼の妻は、公式ではないものの、忌まわしい罪を犯したとされ、彼女の名前はスキャンダルと結びつけられた。良識的な人々は彼女とはもう関わろうとしなかった。彼女は世間から隠遁を余儀なくされた」とのことである。

Byronは決して性的に不能ではないことを証明した。結婚後一年も経たない1815年12月10日に娘が生まれた。彼は結婚式以来、公私にわたり、しかも人前で妻を無視し侮辱し恥をかかせてきたが、この横暴さも別居、離婚の根拠としては不十分であった。また、頻繁に

痛飲し、酔っているといないにかかわらず、脅しと暴力行為で妻を怖がらせていたことも根拠として不十分であった。妻が夫のもとを去ったことの正当化として、夫の背信行為、それを種に妻を嘲ったことを、妻にくり返し加えられた多くの精神的虐待の一つとしてあげたが、それでも十分ではなかった。最後に、現代の学者達によってさえ無視され、彼等の研究対象である過去の社会が当然無視したように彼等自身も当然視しているのだが、Byronの彼女への婚前に始まった性的に淫らな行為はその後も続き一度だけでなく回をかさねレイプにいたることすらあったのに ―― これもまた妻の苦情の根拠としては認められなかったという証拠がある。

Byronの手による結婚の記述から最もよく引用される行の一つは ―― 何人かの人には熟読されたが、彼の死後すぐに焼却された ―― 「ディナーの前にソファーにてLady Byronとことに及ぶ」であった。これは結婚式の日、そして二人共神経質になって不機嫌であった冷たい馬車での陰鬱な道程後の時間について言及したものである。後に彼女が語ったところによると、彼はこの時すでに不思議な威嚇するような予言をし始めていたということである。Annabellaについては、娘のAdaや世間の人々が信じたように、彼女が全く純潔で無垢ではなかったとしても、彼女が不慣れであったのは確かで、召使いが程なく食事だと告げている時の食事前の床入りによる結婚完了は、彼の婚前交渉の中でも歓迎できない不快の極みであったに違いない。

このように始まったものは、同じように終わるしかなかったようだ。Annabellaは「出奔までは妻として自分と暮らしたのだ」というByronの主張は、ひと時の愛情に満ちた幸福な関係を暗示しようとしてはいたが、実際には出産直後の女性にとっては苦痛で辛い経験だったであろう。彼女には夫のもとを離れたい理由は数多くあったが、正当な根拠となるものは無く、少なくとも両刀の剣でないものは無かった。うまく逃げ出すには並外れた決意が必要であり、この努力は彼女のその後の人生を特色づけるものとなった。

社会の容認、財産的自立、生後1ヶ月の子供の養育権を保持しつつ別居をするには、「世間」に、彼女の夫は邪悪な怪物で、自分は欠点のない聖女であると信じさせることが必要であった。しかし同時に、そう申し立てるのが自分だと受け取られる訳にはいかなかった。この目的のためにLady Byronは自分の生活を組み立てた。すでに、有名な弁護士のDr. Stephen Lushingtonの専門的な助言を受けていた。彼は枢密院においてインドにおける未亡人の焼殺に賛成する弁論をすることになっていたが、この貴族の顧客に対しては、生きている限り、またその後もどんな敵に対しても必ず支えてくれた人物であった。彼女は母にこう説明している。「私は、Dr. Lushingtonを全面的に信頼しているわ。世間から疑惑を持たれることは、私のためには全くならないしByronに対して悪意があるとみられるから、ほんの少しでも世間が疑いをおこすような素振りは避けてほしいと言います。要するに、最も私にとって不当なのは世間の目なのです。私の抱えている不運は、目撃者のいる所で行われたことは極めて少なく、他人に支持されない妻の証言は何の役にも立たないということです」と。

Lady Byron自身も法的推論に対する経験や技術を身につけ、その練達ぶりは、お金のかかる協力的な弁護士達を凌いでいた。Byronも最初は彼女の誠実さ、人格、父親や彼の友人に対する態度を誉め、少しは協力的であったが、後になって気が変ってしまった。さらにギリシャでの同性愛行動や姉に対する近親相姦的愛情をあけすけにほのめかす手がかりを当のByron本人が彼女ににおわしていたのだ。なのに彼女は何一つ証明することができないので、彼よりはむしろ彼女の方が法廷でのなりゆきを恐れていた。巷で囁かれる噂に対しては何の責任も主張できなかったが、彼女の目的には好都合であった。結婚して従姉妹となった彼の捨てられた愛人Lady Caroline Lambは、積極的に協力を申し出た。

もう後戻りすることはできなかった。Byron の少年のような和解への訴えを考慮することを拒絶した彼女の頑なな態度を嘆いている歴史家や伝記作家は、彼女の目の前に常にはっきりあったことを見逃している。即ち、もし彼女が再び彼の力の中に身を置けば、彼女は、彼の過去の全行動を赦し、それ以上の衝撃的な非難をいかにも否定してしまったように映るだろうということである。彼女は二度と逃げ出す希望を持てなかったであろう。また、他の時はヒステリックで興奮しすぎる彼女の母でさえも、次のように分別ある指摘をしている。公然の非情や虐待の多くが最初のプロポーズを拒否された仕返しとして彼によって正当化されたとしたら、彼女が彼の元へ戻った場合の彼の態度が一体どのようなものになるかわからないというのである。

Byronもスキャンダラス限りない噂の真実性を否定する代りに、お粗末なほどに短い争いの後、別居に同意した。これによって妻のpin moneyは年に500ポンドに増加し、彼女の相続財産を自由に処分する権利は時期が到来した時の裁定にまかされることになり、結婚の取り決めのその他の部分は変らないままであった。その後すぐにByronは英国を去り生きて帰ることはなかった。Lady Byronの母親が1822年に亡くなりByron夫妻はこのような場合の習慣に従って、生家の姓を付け加えた。仲裁人は、Wenworth家の収入を両者に等分に分けることを決めたが、法律手続が遅れたため、Byronは一年少し後、即ち、死の直前まで自分の分配分を受け取ることができなかった。

別居協定のもう一つの重要な問題である娘Adaの養育権については、何も述べられていなかった。これは当時の法的な事情があまりに父親に有利であったので、Annabellaの弁護士達はこの問題を持ち出さないことに決めていたからであった。もしByronが養育権を求めるなり自分の権利を主張する行動を起こしていたなら、彼はきっと娘を引き取ることができたであろう。彼は決してそうしようとはしなかったが、Adaが大法官庁裁判所で彼に何の相談もなく被後見人にされた時（これは未成年者の財産を守るための法的手段であるが）、父親の尊厳を無視した極めて横暴な出来事とみなし一度だけ特別に抗議している。彼は「娘はどんな場合でも母親と一緒の方がよい」と考えていた。にもかかわらず、別居係争中もその後も、Annabellaの行動の多くが、決定的ではないとしても、娘を保持することへの不安から来るものとして正当化された。このようにして、深みにはまった姦通から重婚、同性愛、異常性愛にいたるまでの様々な噂は少し広まっただけで消滅させることができたが、近親相姦の噂だけは断続的でひそかにではあったが容赦なく人の口にのぼった。

Byronは、子供(Ada)が母親の手から離された場合、彼は、特に健康に害があり政治的にも不安定な外国を旅行することを選択していたので、子供の世話を異母姉Augustaに任そうとしたことは明らかであった。近親相姦の疑惑は同時に、両者の親としての適性をも攻撃した。Annabellaは、極秘にその告発がまことしやかにみえる書類を準備し、Augustaの性格を変革するという口実のもとに容赦なく彼女を迫害した。機が熟すのを待って、Annabellaは娘に名前をもらった伯母の邪悪さを暴いてみせた。AdaはAugusta Adaと命名され、生後数週間はAugusta、Annabella、そしてJudithからも"Little Guss"と実際に呼ばれていた。しかしByron自身は常に彼女をAdaと呼んでいたようである。彼の説明によるとこれはKing Johnの時代にまでさかのぼる家族の名前であった。

ByronとAugustaの親としての適性に対する評判を傷つけたのに加え、Annabellaは自分の立場を強力に作り上げようとした。母性愛の圧倒的な力についての普遍的な前提を考慮したとしても、彼女がいかに慎重に意識的に行動したかを知ると大変驚く。彼女の情熱は、支配を求めてのものであり、ケアのためではなかった。その性格によるものか、または環境

によるものか、気がついてみると、彼女が自分の子供を愛することができなかったことを示す証拠はたくさんある。自分の愛情の不十分さについて少しでも疑いをもつと、彼女はどんな欠点も決して他人に気づかれないようにとの決意を一層強くするだけであった。妻として始まった彼女の自己正当化の傾向性は やがて母としてのものとなり、さらに祖母としてのものになるのであった。

別居の手続きが始まるとすぐ、Annabellaは落着きがなくなり、ロンドンにおいて両親が弁護士や好意的な人達と彼女の名前を使って付き合うことに不満を感じるようになった。「子は必ず楽々と親離れするものだ」と主張し、彼女は事態を自分の手で処理しようとロンドンへ帰った。そこで彼女は、辛い結末まで滞在することになった。そのうちByronが国外へ去って安心できたが、Annabellaは 自分の行動が反論を煽りたてることになりはしないかと心配になり、これを防ぐための慎重な手段を取った。ByronがAnnabellaに母親の義務として和解してはどうかと促した後、彼女は母に「私は子供の幸福を全く無視していると公然と非難されていますが、この問題について手元に保存しておいても構わない手紙を何通かあなたに出した方がよいと思い明日書き始めます」と書き送っている。追伸で彼女が説明しているように、 時間があるので「私は今日、是非保存してほしい手紙を書きます」と述べ、そして子供の健康や日々の生活習慣について指示や問い合わせの手紙を何通か書いた。

しかし彼女は非常に内省的であり、自分の向かうノート以上に、自分の感情や行動を熱心に正当化してみせる相手はいなかった。彼女は考えたあげく子供を愛せないのは養育権への不安感から来るものだと結論し、自分の気持を韻文で次のように表現している。彼女もまた詩を書いていた。

不自然な母 1815年12月16日

我が児よ！あなたから心が離れているようにみえる
悪い母を許して下さい
強く二重に束縛されている私の心、
でも自由になってみせる。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
たとえそう感じなさいと教えられていても
そのとおりに感じることなどできない、―――
かつて献げた熱情は実を結ばず
心の平穏をかきみだした、
最初の愛と同じようなもう一つの愛が
生まれるのを前にして
その弱い絆を思う時、
それが今にも壊れてしまうように思えるのだ！

たいしたものである。彼女の母親としての冷たさまでも、全てが彼のせいなのだ。この詩の日付を正確に辿ると、Ada誕生のわずか数日後のものであり、当時彼女がその後の考えられる結果を予見して逃避を企てていたことがわかる。この詩に表現されている感情はその後も続き、数ヶ月後に書かれた同じような詩には「心がねじまげられて、憎しみさえおぼえる／私はこの子を愛せないのかもしれない」というくだりがある。

やがて時は流れ、Byronが外国へ逃れたことで脅かされなくなり、彼女の養育権への不安

は静まったはずであった。しかし気がついてみると彼女はいまだに母親としての行動を注意深く演出し正当化していた。Adaの満一才の誕生日から数日後に、彼女は日記に育児方針の説明を整理している。

私は母親としての義務を真剣に考え、まじめに実行し、私の特別な状況や忌わしい感情からくる悪い傾向性を取り除くよう努力するつもりである。Adaも、良い習慣の基礎を作り悪い習慣を身につけないよう注意深い賢明な監督が必要な年齢に達したと思う。今までもそうであったが、今こそ母親は普通求められている以上に計画的に絶え間なく子供に注意を向けるべきだというのが私の意見である。・・・　私はこれを妨げる力や私の考え方への共感がえられないことを悩みつつ、私の愛情をあえて傾けていくだろう。―― 今は手控えているのだが ―― 私は愛することの危険、奪われることへの恐れを ―― 敵対するものから悩まされること ―― おかすことになるかもしれない。しかし私はこのようなものすべてに直面するつもりだ。神よ ―― 私が神の与えた意志のままに行動することをおわかりになる神よ。良い母になろうという私のつつましい誓いを祝福し強めて下さい。

Annabellaはユニテリアン派の教義に少し関心を持ったこともあったが生涯いわゆる「無教会派、クリスチャン」のままであった。にもかかわらず彼女は早くから信仰の敬虔さで評判となり、年をとるほどにより一層敬虔になっていた。この敬虔さは、少なくとも初めは、彼女の母親としての優しさ同様、意図的に作り出されたものであった。母親に新しい知人のことを書き送った書簡で、「私は良い印象を与えました。でもとても滑稽なことですが、私がいつも教会に行って、時々『ご信仰』の話をするからという理由で、『聖者の集まり』で私が天国への王道にいると思われています」と書いている。

彼女の、Adaの生活習慣を管理しようとする決意は神の加護や助けを必要としなかった。彼女はAdaが３才の時、日記に次のように記している。

ある人間がある人間を支配する理由は、一般的には支配する人の性格が圧倒的に強いからではなく、その性格のある部分が、支配される人の弱さと一致しているからである。そのため、その弱さを取り除くことが望ましいならば、自分自身の弱さを徹底的に探り、自分を欺くあらゆる想像をやめることが根本的解決の唯一の方法である。

多分、彼女はすでに娘の人生における自分の役割の性質についての考え方ができていたのであろう。Adaの心は母親によってだけでなく、Lady Byronみずからが創作した性格にさらに加えるために招かれたその他のいわゆる「心」の専門家や友人、教師達によっても際限なく分析された。残念ながら日付はないのだが、この不安な母Lady Byronが特に自分と同質だと思ったに違いないある記述はこのような書き出しで始まっている。「他人の考えを支配しようとする欲求はMiss Byronの性格における一つの主な特徴である。彼女は付き合う大部分の人々への支配権を得ることであろう。彼女の支配できない一握りの人は、一般的には、彼女に対して奴隷のような支配権を行使する人々であろう。」この賢人は、これらの嘆かわしい傾向は「彼女の神経系の特性」に起因するものだとしている。Byronとの意地のはりあいでの勝利者は、娘の側の支配したいといういかなる欲求にも打ち勝つための十分な強さを持っていると確信していた。彼女は後になって、娘の性格を「非常に変わっている――大変天分に恵まれているが、非常に欠けたところがある」としている。それは彼女自身の性格とは極めて対照的だとしている。彼女は、「卑しい心を支配する私の力はとても確固たるものなので、警察官とか刑務所長に必要な資質があるにちがいないと思う」と結論している。

このように娘を絶対的に所有し支配しようとする妻の気持が強かったことを考えると、Byronがどのような父親でありえたかを問うことは自然ななりゆきである。Lady Byronが支配への体勢造りに懸命であったのに対し、Byronの思いはきわめて感傷的なものであった。

あなたの心の成長を育むために、
小さな喜びの兆しをみまもる、
大いなる成長をとげるまで、じっとみまもる、
あなたは物事の知識を得ていく、でもそれは
あなにとっては、いまだ驚き！
あなたをそっと膝にのせ、
その柔らかい頬に父親のキスをする、――
こんなことはできそうに思えたが、私には用意されていなかった。
でもこれは、わたしの中に自然とある気持なのだ...
(*Child Harold's Pilgrimage* , canto 3, stanza 116.)

彼の父親としての性格は、1817年に生まれた婚外の子Allegra ―― その養育権は乳児期に母親から取っている ―― への対し方にある程度うかがうことができる。私生児の子供と父親は、母親よりも社会的により受け入れられる存在であったので、この取り決めは、嫡出子として得られる社会的、世俗的利益と同様のものをAllegraに与えたと思われる。しかし、結果的にはByronはほんの短期間しか彼女を手元におかなかった。当時Byronはヴェニスに住んでいて、数ヶ月間は当地の英国領事の家にAllegraを預けたが、そこでは彼女はこころよく思われず他の人にたらい回しされ、結局父親のもとに戻った。彼女が他の人々から興味本位に注目された結果、わがままになり多くを要求するようになると、Byronは彼女を修道院へ預けた。

Byronは政治情勢も不安で、医学的にも不健康な気候の地で暮していたので、幼い子供にはそれなりの場所を見つけてやらなければならない実際上の理由があった。しかしひとたび預けてしまうと、詩人のShellyはAllegraを訪問したが、Byronは決して彼女に会いに行くことはなかった。子供が、訪問、お菓子や贈り物をねだると、立腹し欲得ずくの愛情だと非難した。しかしAllegraが5才をすぎたばかりで死んだ時は、Byronは身も世もなく悲しんだ。高いお金を払って彼女の死体に香料を詰め防腐保存し自分の母校Harrowに埋葬するため英国へ送り返した。もしAllegraが生きていたならば、Byronは子供の知的成長にどのような手助けをしただろうか。彼は、わが子をカトリックとして育て、ヨーロッパ風の結婚をさせるつもりであった。彼は心の底から知的な気取りのある女性を嫌っており、彼の揶揄はしばしば一人よがりで独善的なAnnabellaを涙させる結果になった。自分の頭脳に誇りを持ちながらも他人の批判には臆病なほど繊細であったAdaに彼はどんな影響をもたらしたであろうか。果たして彼の冷笑的な才に直面してもなおAdaは活躍することができただろうか。

妻への離別を歌った有名な詩で、Byronは次のように主張した。「妻を決して許しはしない。決して。でも、僕の心は君に背くことはないであろう」と。しかし、すぐに彼は姉に向かって妻をはげしく非難し、気取ったインテリ女性の非常に悪いイメージを使って公然と世間の笑いものにした。

彼女の得意の学問は数学であった、
その最高の美徳は心広きことであった、
機知を手がけることもあったが、

それは全くのアテネ風であり、
袴つけた物言いとなると、
曖昧模糊として荘重であった
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
彼女はラテン語を、つまり、「主の祈り」を知っていた。
ギリシャ語も、アルファベットも、嘘はもうしあげないつもりだ。
フランス語の物語類をあれこれ読み散らしていた、
話し方となるとこれは濁りなしとは言えなかったが.....

これが実生活から切り取られたものだと認識できない読者のために、彼はまぎれもない自伝からの数篇を付け加えている。

とうとうイネスは薬剤師やお医者様を連れて来て、
可愛や夫は狂気だと証明しようとかかったが、
狂気にしてはどうしても、正気の合間がありすぎる、
それでも今度は悪党（バッド）だと決めつけた次第である。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
日記もつけたりしてたから、夫の弱みは中に洗いざらいにかいてあるし、
本や手紙を詰めこんだトランクもいくつか開けてみた、
いよいよとなれば、これにみんな物を言わせる手もあるのだ。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
巻き起こった罵詈讒謗を彼女は冷静に聞き流し、
夫の苦悶をこの上なく、毅然として眺めやったから、
世間はことごとく感嘆した、「何という広量な方だろう！」と。

夫が世人の非難の矢を浴びている際に、妻たるものがかくも我慢をしているとは、
英知の極地にちがいない。
それに広量と言われるのは心愉しいことである。
それで目的が達せられれば、なおさら愉快に相違ない。
それに法律家たちの所謂「犯意」にもこういう行為は入らない。
自分から仇をかえすのはたしかに美徳とは申せぬが、
他人が君を傷つけても、それは、わたしのせいじゃない。
（*Don Juan,* canto 1, stanza 12-30. ドン・ジョアン 小川和夫訳より）

別居係争中とその直後にわたって、彼女が世間に見せつけた度し難い自己正当化のイメージを相殺するために、Lady Byronはその後の人生においては自分を感情に支配された人間であることを示そうと努めた。彼女の神でさえ「すべて愛だけよ」と友人にいっている。日記の中で、自分の目立った弱さは、「他人の行動を実際よりも高邁だったり世俗的でない動機のせいにしたこと」であったと書いている。彼女が当時許したいと願っていた罪人にとって最も有益なことと常に判断し、真実への避けることのできない執着のために、すべての原理を完全に放棄してしまうことはできなかった。それほど彼女の「情熱的な献身」は圧倒的であった。

今や彼女は、家族・友人の殆んど全ての支配権を獲得し、娘に対しては他の誰よりも絶対的な権限を持っていた。しかしAdaが成長するにつれて彼女の仕事はより微妙に難しくな

り、彼女の努力はそれだけ敏感さと巧みさが必要とされた。養育すべき娘を持ち、潔白な美徳ある人生を生きようとする気持も必要であり、また、Byronの誤れる青年時代をふりかえって得たものを考えると、自分に期待されていることは教育に関心を深めよい仕事をすることだけであった。

村の学校創設は、郷紳階級の夫人達の最も好ましい慈善事業であった。そこでは貧乏な子供や孤児を、男子であれば農業の仕事、女子であれば家庭内の仕事を訓練させた。このようにして学校は上流階級の責任の証となっただけでなく訓練された召使いや労働要員をも提供した。

Lady Byronは1818年にSeahamにある両親の邸近くに、そのような学校を創設した。この計画については、以前のチューター Mr. Frendに助言を求め、またその他の教育事業については次のように述べている。「私の娘は幸せな頭の良い子供です。ちょうど文字を習いはじめています。私はこの手習いを早期教育のためでなく、彼女の盛んな想像力からはかなり難しい集中力をつけるために使っているのです」と。

Mr. Frend は想像力を抑制することには反対しなかったが、その口実は排し、いつもの彼流のおどけたやり方で彼女の自慢話に返答している。「あなたとお嬢さんについてのとても良い話を聞いて喜んでいます。お嬢さんについては全く急ぐ必要はありません。私の長女は驚くほどの天才ぶりを示しますが、私がとても有効にそれを中和させているので、母親は、娘が6才か7才の時には、娘の学習が遅れはしないかと不安を感じはじめるほどでした」と。彼が言及しているのは娘のSophiaのことで、後に彼女はLady Byronに最も奴隷的につくした友人の一人となりAdaを中傷する人となった。しかし彼の文通相手（Lady Byron）は、この例を聞かされても自分のやり方を変えることはなかった。

彼女は Brougham伯爵の勧めで、スイスのHofwylにあるEmanuel de Fellenbergの経営する学校にも関心を持つようになった。彼女はとても感動してその歴史についての論文を書いた。Fellenbergの「行動によって学ぶ」やり方はナポレオン戦争によって行くあてを失った孤児を教育するPestalozziの教育法から派生したものである。しかしFellenbergは二段階に分けて学校を運営した。一つは貧しい子供達が対象で農業だけでなく大工、機械、革製品などのような様々な実際的技能を学んだ。もう一つの「より高度な」学校は裕福な子弟対象であった。この場合は、「行動」は軍事訓練、水泳、乗馬、徒歩遠足、スケート、庭作り、轆轤細工などその他の機械的な操作でまかなわれた。まだ教えるのに正当な根拠があると思われる行動があるとして Lady Byronは次のように続けている。

身体を剛健にする必要がある、あるいは、多くの場合そうなのだが、肉体的に疲れさせる必要があると判断された上級学校の生徒達は、しばらくの間、低レベルの学校の農作業に送られる。この作業は、いずれの場合にも健康のための薬として効果があった。一方、少年達にとっても早朝3時に起床し、麦打ちで朝食が取れることは、最も大きな楽しみの一つとして考えられていた。このようにして裕福な家の子弟達は、貧しい学校の生徒のする労働を尊重することを学んだ。また一方、貧しい者はより金持の仲間を敵としてではなく、共感できる友人として見ることを学んだ。

彼女はこの制度は「雇用する立場の指導的階級が、いかに、自分の財産を増やすために彼等の労働力を利用すると同時に、労働者階級の人々を教育しモラルを高めることが自分達に課された義務だとわかるように訓練することができるだろうか」という問題解決への第一歩であると感じた。

学校は男子のためだけのものであり、女子に対しては社会的配慮が常に教育的なものより優先されており、上流階級の女子は性別をこえ、階級をこえ交際することは如何なる形

をとるにしても注意深くその機会を奪われていた。後になってLady Byronは孫の一人をしばらくの間Hofwylに学ばせていたが、彼は上級の学校の男子とさえ交際することを許されなかった。彼女は、男子校は同性愛の温床であり、ByronはHarrow校で堕落してしまったのだと堅く信じていた。Ealing Groveの自宅近くに彼女が創設した学校は貧しい男子だけのための実業学校であった。

勿論、実業技術のいくつかはAdaに向くように改変されのだが、Adaが学校で学ぶことなどは思いもよらなかった。彼女は縫い物に秀で早くに習得した。後になって、彼女は19世紀の既婚女性が室内でかぶったリボンをつけた帽子を、愛情と尊敬をこめて、友人であり恩師であったMary Somervilleのために作った。さらに伯爵夫人になってからも、自分のペチコートを作っていた。

Adaの名前を使って詳らかに書かれた6才のAdaの進歩を記録しているノートの中で、Lady ByronはAdaには「家庭教師の弊害」をさけるため、ほんの時々だけ助けを借りる以外は自分が教えようという決意が表明されている。しかし、もう一冊のノートではこの同じ時期に雇われたが8週間しか続かなかった女家庭教師の経験が明らかにされている。この気の毒な Miss Lamontの仕事はとうてい容易なものではありえなかった。まだ5才半だというのに、Adaのスケジュールは午前中には算数、文法、綴り、読書、音楽でうめられており、それぞれがたった15分で、夕食後には地理、絵画、フランス語、読書とすべてが敏速に従順に行われた。少なくとも最初はそうであった。記録を読み進むと、この小さな生徒は時々落着きのなさを示している。授業が質問に答えるという形式で続けられ、Adaはその間はずっと一枚の板によりかかって過ごすことを余儀なくされたことを考えると、彼女の落着きのなさは少しも驚くべきことではなかった。授業以外にも母親に微動だにせずに横になっていることを要求される時間もあった。

良いふるまいや出来栄え対してAdaは"ticket"をもらったが、その後の失敗や反抗的態度があれば、その分帳消しにされさえした。このticketをたくさん溜めると、本や絵のような何かふさわしい賞品と交換された。にもかかわらず彼女のために記録されたノートには、彼女は主として母親を喜ばすために勉強していたはずだと強調している。

私は、ママをとても喜ばせたい。二人とも幸せになれるように。・・地理学はとても面白い 。・・フランス語は他の科目のようにはあまり興味がもてない。 ―― そしてある晩、本当は好きなのに、おろかにも算数や数学を勉強するのは嫌いだといってしまった。その時は自分が何を考えていたのかわからなかった。努力すれば算数は今よりもよくなるだろう。じっとしているのも、もっとよくできるだろう。そして、じっとして、絶対、身動ぎしないことだって。

Miss Lamontの日記は、横たわっていることと、母を喜ばすことの要求が厳格であったことを立証している。もし、彼女が指をあまり動かすと、彼女の両手は黒い袋に入れられた。

・・・Lady Byronの前では、すぐに控え目になったり、指をおとなしく指を入れる袋をつけられ、クロゼットに30分間も閉じ込められたりした・・・Lady Byronが2時にLeicesterに出かけるとその留守中、Adaは一瞬たりとも、母親が帰った時良い報告で喜ばせようとする気持を失うことはなかった。

Miss LamontのLady Byronの検閲のもとに書かれているので、母親の留守のAdaの動機についての記述はあまり深刻に受けとめる必要はないということを覚えておくべきであろう。母親は実に頻繁に、気が散ってしまうほど、授業に同席した。

夜の勉強中に何か少し不注意なことで叱責された時、Adaは怒って口答えしようとするが、すぐに自分をおさえて、母親のところへ行き、小声で「私に何か良いアドヴァイスを下さい」と言うのであった。時折、母は娘の怒りばかりか自信のほとばしりも、いとも簡単に抑えつけることもあった。

ある晩、母がお茶を楽しみ、Adaは歌を歌って一人で楽しんでいた。Adaが大きな声で「私の声はとってもいいわ。ママより上手に歌えるようになるわ」と叫んだ。Lady Byronは彼女を呼び寄せ、相手の心に刻みつけるように「Ada、あなたの声は、あなたが自分に与えたのですか」と言った。これに対してAdaは「わかっているわ。ママ、この話は私が寝る時にしましょう」と答えたのだった。

Miss Lamontは解雇され、Lady Byronは彼女を推薦してくれた夫人に、その理由をこう説明した。彼女は「義務感と愛する人々からの賛同を得たいという願い」だけでAdaを教育する責任を果たす強さと信念を持ち合わせていなかった。そのかわりにこの不運な女家庭教師はなだめるか言い聞かせるというような「複雑な方法」に頼ってしまうことが、よくあった。

Miss Lamontが去ってすぐに、Adaは生まれて初めて、父親についての避けては通れない問を投げかけた。Lady Byronはこの時の事をこう記している。「Adaは今日、私に、祖父と父は同じかと尋ねた。私は違う、別の家族なのと言うと、彼女は、'私にはパパはいないのね'と答えた。私はあなたがもう少し大きくなったらもっと話してあげますと言った。Adaはこの問題にあまりこだわってはいないようにみえた」と。幸運なことに、Lady Byronのこの記述は、この時のものか、あるいは似たような場面でのAda自身の説明と比較することができる。これはAdaの最も親しい相談相手になったと主張しているMary Somervilleの息子Woronzow Greigによって記録されたものである。彼曰く、「彼女が私によせた信頼は一人の女性が安心して誰かを信頼するということよりずっと大きく、彼女の秘められた経歴はたとえ私が彼女の恋人だったとしても、そのような関係にある人にはあえて話すことはなかったと思われる多くのことを私に語ってくれた」と。Greigによると、

Adaの母親に対する気持ちは好きとか愛情というよりはむしろ畏敬と賞賛に近いものであった。母娘の親しさは二人の間には存在せず、お互いを誇りにしていたにもかかわらず、常にある程度の反感と不信感があった…。さらにAdaが幼い頃、母と庭を散歩していた時「ママ、他の女の子達はパパがいるのに私にはいないのはどういうこと？」と尋ねたことがあった。Lady Byronは恐ろしいほどの厳しさで脅すように二度とその話題を持ち出すことを禁じたので、このかわいそうな娘は縮みあがって自分の殻に閉じこもってしまい、この時感じた母に対する恐怖感を死ぬまで持ち続けたことを何回となく私に話してくれた。

母親のこのような教育方法にもかかわらず、Adaがほぼ生涯にわたって学問への愛を持ち続けたことは驚くべきことである。彼女は、地理よりも数学を好むようにさえなった。また極めて幸運なことに、ほどなくAdaという小さな存在にすでに重くのしかかっていた母親からの、また、社会的な制限を弱めることになる一連のどうしようもない病気にはじめてみまわれたのであった。

Harriet Martineau, Florence Nightingale, Elizabeth Barrettのように、Lady Byronは病弱 ―― 確かに大抵は本物だった ―― が同情を集め、すべての女性に期待されていた退屈でわずらわしい義務を免除され、後世の人々がより価値があると認めた活動を奇跡的に追求することのできた19世紀の偉大な病弱者の一人であった。Lady Byronの病気は旅行をしたり、慈善

事業を設立したり、家族の関心事を監督することができないという性質のものではなかった。Adaと同様に、Lady Byronも健康で活発な子供として出発したが、青年期の終わり頃から次第によく病気をするようになった。実際、彼女の食事に関する記述や薬を服用する際の準備を読むと、彼女が自然の回復力を保って68才まで生き延びたことに驚きを感じる。Adaの病気はそのように都合のよいものでは決してなかった。

当時の上流階級の人々にとっては、野菜は栄養の源としては良いものだとは考えられておらず、実に、果物は子供達には有害だ考えられていた。ある時期、Lady Byronは、「肉、卵とビスケットしか」食べないと宣言した。実は、彼女のマトン好きは伝説的なものであったのだが。頭痛、消化不良、「胆汁による発作」が続くと、彼女のかかりつけの医者は、毒性の高いアンチモンや亜鉛のような金属性の塩の調剤を処方した。医者も患者もLady Byronが「通じ薬」（opening medicine）と呼んでいた吐剤、緩下剤、下剤をよく使っていた。処方箋交じりの手紙はゴシップのように自由に人から人の手に渡った。実際は、医者も患者より知識があるというわけでもなく、郷紳階級は権威のある立場を使って自分達と同様、召使い達にも薬を投与していた。ある手紙ではLady Byronは「腸の炎症で危険な状態にあった女中を、折よくひまし油を投与して」命を救ったと誇らしげに書いている。

Lady Byronと彼女のおかかえの多くの医者達は瀉血の効用を堅く信じていた。この「勇ましい」医学の基本は、何世紀もの間、幾度かにわたって波の高まりのような人気を見せていた。発熱、腫れ、興奮が伴う症状はどれでも血が多すぎるためだと考えられ、その血が炎症を起こしている場所や体全体に不純物を運んでいると考えられていた。瀉血は出血に対してさえ適切な治療だとされていた。この論理は、明らかに、出血は余分な血液や毒を自から取り除こうという体の試みであるという信念に基づいていた。医者の立場からみても、瀉血は患者の症状を「鎮める」効果、つまりリラックスし静かにさせる効果があった。医者の期待する通り快方に向かうという筋書きにかなうのだった。

瀉血にはいくつかの方法が可能であった。ランセット、吸い玉放血法、またはヒルを使う。Lady Byronは後の治療法を大変好んだ。ある手紙の中で、彼女は「今朝、恐ろしいヒルに吸われかなりよくなった」とAdaに得意げに語っている。それは殆んど、どこにでも適応された。女性に苦痛を与えていた多くの症状は、生殖器官と何らかの関係があり、身体的、精神的な多くの不調は、性的興奮、正確には生殖器が充血したことによるものだと考えられていた。例えばAdaが4才の時、Lady Byronは母親に、医者が「Adaを出産して以来、私のすべての病気は子宮の不調によるものであり・・・その場所の血管に負担がかかりすぎるので吸い玉放血法とヒルによって常に血液量を下げる必要があると医者は確信している」と打ち明けている。この治療法は彼女の要求の多い生理機能を満たすほどには熱心に追求されなかった。ずっと後になって、既婚女性となったAdaが母親の運動不足のことに触れた時、（Adaに焼くように頼んだ）手紙で「私の存在目的の一つが満たされていない結果、一連の器官が充血し、運動すれば大変なことになり、致命的な病気になりかねない」と説明した。適切な時期に十分瀉血することで、この危険な症状を防ぐことができると彼女は考えていた。

このような食事や治療方法に固執していた母親の監督のもとで、Adaが早くから胃がデリケートになってしまったことは驚くべきことではない。これは後年、彼女をおそった苦しい「胃炎」とは無関係であったかもしれないが。（Adaの生涯にわたっての健康の問題については付章を参照すること。）その後8才の時、彼女はげしい頭痛に苦しみはじめ、視力にも影響があり数ヶ月間以上も少なくとも読書に支障をきたした。頭痛は頭の中の血管が拡張したためとこれまた決めつけられ、瀉血（子供でさえも、これから免除されることはない）は好まれた治療法であった。当時ギリシャにいたByronは、娘が「頭に血が上って」苦

しんでいるという知らせを受け、すぐに、あたり前のことを考え、こう返事を書いている。

多分、成熟した女性になる時には、ずっとよくなるでしょう…。もし彼女がとても多血質であるならば、我々の寒い気候の中で普通と考えられているより早くその時期に達するでしょう…。イタリアやアジアでは時々12才でそうなる娘もいて、もっと早い娘もいます。私の知っているイタリア貴族の家では、何と10才ということもありました。何もしてないのに、そのように早くから 血液が頭に偏って多いのは、早熟の傾向と何らかの関係があるのではないかと考えざるを得ません。

Byronの「多血質」という言葉の使い方、それにLady Byronが「胆汁性の病気」に言及していることは、当時の医学的な考え方がまだ古代ギリシャの体液理論の影響を留めていることを示している。これは我々の体は宇宙を構成している4つの要素に対応する4つの体液即ちフモールを含んでいるというものである。体液は ―― 血液、粘液、黄色い胆汁、黒胆汁 ―― それぞれの相対的な割合によって健康や病気ばかりでなく、ある性格が支配的であることをも決定してきた。体液理論は、身体的、心理的な体系であり、心と体を結びつける一つの試みであった。Adaの人生には他にもそのような理論が関係することになる。

Adaは子供時代が終わる前に不快感、痛み、身体的束縛によくみまわれた。もう一つ、頻繁に登場してくるのは死であった。溢れるばかりの愛情をそそいでくれた祖母がAdaが6才の時に亡くなり、2年後には神秘につつまれた父が（偶然ながら、主治医による放血多量による死で）亡くなった。そして翌年には祖父が死んだ。この頃のAdaの悲しみと当惑は、年下の従兄弟、父の称号を継いだ人の息子に宛てた二通の手紙にはっきりと読みとれる。Adaはその従兄弟を"Brother"と呼び、大人が全部死に絶えた時には、彼と互いに愛し合い、慰めあっていることを夢想していた。

一方、家族の死は、Lady Byronの収入と自立を大いに強める結果になった。これみよがしの地味な生活であったため、あきらかに、収入の全ては必要でなく、自分の寡婦給与は、地所邸宅を奪われた爵位を受け継いだ新しいByron卿に手渡していた。Jane Austenは、収入1万ポンドであったら貴族同然だと語っているが、多くの貴族はかなりそれより低い額で何とか暮さなければならなかった。とは言っても、最低の貴族のライフスタイルを維持できないことは貴族として恥であり品位を落とすことだと考えられていた。Byronは遺言で、彼のお金（寡婦給付金を与えた後に残った金）をAugustaに渡すとしていた。彼女も人数は多いが無能な家族をかかえて新伯爵と全く同じ程度にお金を必要としていた。しかしAnnabellaは献身的で忠実な友を確保するためには、財政的恩義が如何に効果的かがわかっており、Augustaに対しては、信心深い教訓主義では殆んど隠されない嫉妬と怒りを心に抱いていた。

夫と病気の両親がいなくなったことで彼女は自由の身となり、Adaを伴って大陸へのグランドツアーに出かけた。海外には二年間滞在した。帰国後ほんの2,3ヶ月で、Adaははしかにかかり、さらに深刻な合併症にみまわれた。この時、彼女は13才、大事な年齢であった。帰国以来、彼女は天文学への興味を深め、それについてMr. Frendと彼の娘と文通をしていた。1829年5月27日にMr. FrendはLady Byronに次のような問い合わせの手紙を書き送っている。

Miss B(yron)は天文学をどうこなしていますか。来月末には彼女に、木星が効果的によい時間をみはからって訪れるでしょう。御宅によい望遠鏡をお持ちであればと願っています。そうすれば衛星を伴ったこの惑星をスケッチし、引き続き何夜か衛星の位置の変化を観察するのは楽しい勉強になるでしょう。幸運に恵まれれば2,3度の月食と星食を見ることができると思われます。その折には、私だったら

本などを調べることはしないでしょうね。彼女なら間もなく起きる現象を大体推測し、自分で観察して確かめることができましょうね。

しかしAdaは星の観察を楽しめるような状態ではなかった。6月29日に「この2ヶ月間、Adaのことについては私が深刻な不安を感ずるに足る理由があります…。Adaはこのところ全く絶望的な状態のままです。はしかによるいろいろな影響とあまりにも急速な成長のためか、歩いたり立ったりする力は全くありません。私は今の身動きできない状態が危険なものではないと信じていますが、このため彼女は体を使うことはもとより知的な活動も奪われています。そのようなわけで、私の考えも時間もいつもよりずっと彼女のために占められているのです」と返信の送れた理由を説明している。

両足の一時的な麻痺の考えうる原因はいくつかある。しかしたいていの原因は、Adaの場合のように完全に回復する場合は、2,3ヶ月以上も続くことはない。Adaの「不具」が、少しずつ和らぎながらといえども、その後数年間続き、結婚適齢期になった時にしてようやく終わったということは、彼女の回復の遅れは実際には長期間の厳格な横になったままでの療養によるものであったことを示唆している。この療法そのものが筋肉の正常な緊張状態を弱めるものであり、Lady Byronが好んだいろいろな体を衰弱させる治療に加えて、Adaはこの療法にも従ったのであった。

Adaの発病後一年間に、母親の友人にAdaが書き送った何通かの手紙によると、彼女は一日に30分間しか上半身だけ起ことが許されず、夏も終わる頃、ようやくこの時間が1時間になったことがわかる。彼女は自分の「元気のなさ」を認めているが少なくとも学業は板にもたれかかった姿勢で再開されていた。しかし1831年秋には、松葉杖を使って歩き、楽観的に乗馬道を作るための助言を求めていた。そしてついに1832年9月、以前、母の女中であったClermontさんから何の「助け」もなしで歩くことができるようになって、おめでとうとの手紙を受け取っている。しかし奇妙なことに彼女の母はその6ヶ月位前から、彼女が手に重いものを持てば歩くことができたことに気がつき、Adaの病気は少なくともバランスの問題であることを示している。その後もしばらくの間は、よく気分が優れなかったり目眩がしたりしていた。

まだ松葉杖と使っていた頃、Lady Byronの新しい流行の関心事についての最初の言及が二人の往復書簡にみられる。Lady Byronが友人を訪ねてロンドンにきているので、Adaに馬車で出てきたらどうかという提案への返答にそれは表われている。Adaは奇妙にも、今の状態を中断したらラテン語の動詞の勉強はどうなるのかと心配して、一人でいることと学問をやめるのは気が進まなかった。最後に「一階には寝室があるのですか？もしないなら私にとってはかなり不都合です。私の治りつつある器官におこっている良い事も悪い事も申し上げたので、後はあなたの判断におまかせします。」と母に伺いを立てている。

Lady Byronが早くから骨相学に肩入れしたことは間違いなく、一旦そうなってからは、流行に左右されることはやめている。創設者の一人であるSpurzheimはその方面では遅れている英国人に教えるために1814年に海峡を渡ってはいたが、ロンドン骨相学会は1824年まで設立されなかった。理解されるのに10年を要した。古代体液理論と同様に、骨相学は身体（この場合は脳）と心を結びつける一つの試みであった。脳の「作用」を一連の行動の「機能」の点から分類し、当時の解剖学者の理解によるこれらの機能を脳の構造と関連させるという試みがなされた。脳のある「器官」がそれぞれの機能即ち行動傾向を生み出すと考えられていた。正確に脳にはいくつの作用があり、その正確な場所はどこかについては、かなり議論のあるところであった。その作用の中には「闘争好き」「建設的」「破壊的」「欲張り」のような感情と性向が含まれていた。「尊敬」「希望」「理想」「良心」

のような感情の働きとそれに関連する器官もあった。さらにもう一つの大きな分類として「個人」「形態」「大きさ」「重さ」「色」を含む「認知機能」もあった。最後だが、「比較」「機知」「因果関係」「模倣」のような「内省的機能」もあった。この機能のうちより高貴でなく望ましくないものだけは、下等動物と共有していた。特定の個々におけるこれらの機能に対応する器官は、大きい場合も小さい場合もあり、それに応じて対応する気質を多くあるいは少なく作り出す。頭蓋骨の形はその下の隆起のまわりに形成されるため、種々の器官の大きさによって影響された。したがって尊敬の心を生み出す器官の大きい人は、その人の敬虔さや献身の行動によってではなく、拡大された器官のある場所にできた頭の瘤によって骨相学者から特定された。
この時代に多くいた伝記作家の一人が、著名な骨相学者Devilleとの会話を次のように記録している。

彼は・・・他人の意見に敏感すぎないようにと注意しなければならないある匿名の夫人についての話をした。数年後、彼女は再び娘を連れてきて、話が終わると娘を別室に行かせ、自分の頭蓋骨について彼に相談した。彼女の過敏さは恐ろしいほど強くなっており医学的治療を必要とするほどであった。後にパーティーで彼女に会うと、彼女はLady Byronだと名乗ったのである。彼女の3回目の訪問は、Mooreによる彼女の夫（Byron）の伝記が出版された頃で、彼の処方にしたがって、彼女が夫の伝記は読むことはなかった。

Mooreの *Life, Letters, and Journals of Lord Byron* は二巻本で1830年、1831年に出版され、その頃までにLadyByronは何年間も骨相学者の診断を受けていた。Devilleが彼女の頭の瘤を測って、世論に敏感であると結論を下したのは正しかったかもしれない。しかし彼女にMooreの本を読ませなかったのは正しいとはいえなかった。彼女は、おそらく、ごく内輪の人々が読むために印刷されたと考えられる伝記に対する反論を記載した小冊子の出版までした。Mooreは第2巻にそれを含めることを提案した。

殆んどの骨相学者は医者であった。しかし精神分析と同様、骨相学はどんな素人でもできるゲームでもあった。それは医学的、科学的であると同様に、社会的、宗教的な意味合いを持つものであった。頭の瘤やその下にある器官は先天的なものだとしても、適切な訓練と方向転換をすれば、ある範囲での補完的な拡大と縮小は可能であった。そのため骨相学は「支配者」側、即ち両親、教師、雇主、看守、精神病院の看守に 思いやりのある厳格な態度をとるよう勧めた。骨相学は、進歩的ではあるが革命的とまでは言えない考え方をもつ一種の立食形式で出された料理ようなものを提示し、そこからLady Byronのような意志の強い頑固な女性は自分の性分に合うものを選び取ることができた。他人に対する自分の判断や宣言に最後の権威づけをするのには、打ってつけのものであった。

Adaに宛てた彼女の手紙の助言や奨励には骨相学の用語があちこちに使われている。ある時は「Adaの自尊心の瘤をもう少し高めてほしい ―― たしかに病的なほど感じやすい」と記し、またある時は、Adaの自尊心は全くあまりにも高すぎると感じるとしている。Adaもすぐに骨相学の語彙を採用したが、その体系全体に対する態度は母親との他の係わりに対してと同じように、変動し相反する感情をもつものであった。彼女の科学的素質は知り合いの科学者達の意見に照らして骨相学の考え方を押さえただけでなく、個々の骨相学者の診断力も試すこととなった。懐疑的なBabbageは勧められていくつかの骨相学的検査を受け、その結果はAdaが保管していた。Adaが母に書いた手紙は、Adaが疑問をさしはさむことを許された数少ない分野の一つについてのLady Byronの確信に挑戦する長く続く論争になることも時にはあった。例えば、1841年2月にはAdaは母の信念が最近出版された骨相学に批判

的な本によって全く動揺していないかどうか尋ねる手紙を書いている。Lady Byronは如何にも彼女らしく、次のように答えている。「人間の頭についての私の持論を変えるようなものは何も読んでいないといえます。人間と同じ原理を動物にあてはめるのことこそ間違っていると思うからです」と。

翌月、Adaは再度手紙を書き、夫と友人と三人で、数年前にLady Byronを病的なほど敏感だといった、その人物Devilleを訪ねたことについて述べた。三人とも匿名で訪問したが、三人の中では明らかにG.Wilkinson卿が特別に尊重されていたと伝えている。これはDevilleの洞察力のなさを示しているばかりでなく、匿名が成功した証拠であった。彼は初めて会う伯爵や伯爵夫人よりも変装した探検家、文筆家であったWilkinson卿に心を動かされたのであった。

彼は、私のことに関して、いくつかの点で誤っていると思います。彼は一つの性格を極めて上手く正確に表現しました。即ち、私の少しでも他人からけなされた時の激しい苦痛と屈辱感、状況を驚くほど誇張し大袈裟にする性向です――彼は私が他の全てのものより感情を優先することについて長々と語ったのです。ところでこれは誤りです。私は知性（intellect）が勝ってないとしても――私は勝っていると思うのですが――少なくとも知性は感情と同じくらいはあるのです。彼は闘争心、破壊性、自尊心、希望、秩序、および時間の感覚など頭のどこにもないといいます。そして、堅固、良心、因果律がなければ人格は弱いものとなるというのです。パリで大家に骨相学診断を私達が受けることはできるでしょうか。

明らかにDevilleは、上流階級の女性達がひどく気に病む、社交上の不安感、ゴシップにすぐ傷つくこと、自意識が過剰であることにつけこんで、自分が常に女性患者達の心をとらえられることを早くからわかっていた。全く感情的な母親とは対照的にAdaの知覚・反応の主要なあり方は知的であるという神話は、このようなやりとりが交わされた時、すでに動かし難いものとなっていた。この時期は骨相学と催眠術が一緒になりつつある頃であり、催眠術が二人の間のさらなる戦いの場となるのは当然のことであった。

Adaは、通常の時期（17才になって初めてのロンドンお目見え）に社交界にでることができるほどには十分回復していると告げられていた。これは若い女性達にとっては一つの重要な儀式であった。女王の応接間でお辞儀をすませると結婚してよい年齢となるのである。またAdaは自分の秀でた知性を使って、成人した子供に両親が与えるべき自由についての見解を母親に説明しようとする文書を作成してこの機会を祝った。これとAnnabellaが一人でロンドンへ行くために両親の元を離れる理由を宣言したものとの比較は、大変興味深い。

私が貴女と違う大きな点は「あなたが神をよりどころに永久に私の守護神であろうとしている」ことです。「汝の父母をあがめよ」という戒めは、少なくとも両親に従うという意味においては、子供時代を過ぎた子、つまり青年期の最初の何年間がすぎた年齢の子供に適用するなど私は、考えたこともない命令です。私は子供時代も一年毎に、子供の親への服従は少なくなると思います。子供が成長した後、最善をつくして子供を育てた親が、親への感謝を要求するのはわかりますが…。しかし、子供だけに関係があるような事柄に、親といえども子供を指示したり服従を要求する権利は全くないと思います。貴女が私の服従を要求できるのは法律によるものだけであり、子供時代が終わった後は服従を期待する本来の権利は貴女にはないと考えます。21才までは法律であらゆる点で親は服従させる権限があります。しかしその時点で、私だけに関することには、あなたの権限と請求権は無くなります。しかし貴女の便宜、安心のために私の配慮や思いやりを要求することは年と共に減るのではなく増えていくものと思っています……貴女が子供に服従させる自然の権利を持つ時を子供が過ぎたなら、法

が代って貴女の意思を強制する権限を与えるのだと私は考えます。

もしAdaがこのような方法で、わだかまりを一掃し、母に自分の考え方を理解してほしいと望んだとしたら、失望するのは目に見えていた。Lady Byronは、娘の自立のどんな試みに対しても、道徳的な圧力をかけ、その上、何のためらいもなく自分に同情してくれる取り巻き達に何でも話し、今度はそれを聞いた人達が、少しでも母を尊敬してない態度を見せるとすぐさま、Adaを叱責し説教した。Ada が母の言っていた「会話による訴訟」（Lady Byron以上にその効果を知る人がいようか）をあきらめ、より行動的な反抗の形を行使したのは驚くにあたらない。

Adaの身に起きたある事件が、結婚に影響を与えるかもしれないほど恥ずかしいと考えられたので、Lady Byronと友人達は、非常に遠回しの言葉だけを使ってそのことに言及している。唯一残っている明確な記述は、Ada自身のものであり、しかもまた聞きしたものである。それは彼女の腹心の友、Woronzow Greigの家族書類の中に残された回想録に出てくる。（彼が特別に関心を寄せていた）彼女の家系図を示した後、彼の回想はより個人的なものとなり10代のAdaの姿を彷彿とさせる。

Ada Byronに関する私の最初の思い出は1832年か1833年頃で（1833 or 4が消されている）、彼女がまだ少女で私の母の家、Royal College Chelseaに訪ねてきた時のことであった。……そんな若い頃、すでに母親のLady Noel Byronからも充分認められていた科学に対する明確な好みがあり、機会をとらえては私の母との付き合いを深めていた。当時のAdaはどちらかというと太り気味で不器用、顔色も悪くあまり健康そうではなかった。彼女はよく横になり、少しでも高いところから下を見ると目眩の発作をおこしていた。彼女は愛想がよく飾らない人に思えた。その年齢の娘にはごくあたり前なことであるが、口数もあまり多くなかった。彼女は遠慮がちな恥ずかしがりで自尊心は強く持っていたが、後年明らかになるように自己中心的なところが少なからずあった。彼女の道徳的勇気は驚くべきもので決意の強さも際立っていた。

Adaが目眩と疲労し易いことについて述べているが、Greigは彼女が松葉杖を使っていたことは述べていない。従って二人が知り合ったのは1832年より後の消されている年であったとする方がずっと妥当であろう。多分、Adaが遺している手紙の証拠からすると1834年の初めということになる。彼女の外見についての描写は、彼女の父の古い友人、John Cam Hobhouseによって残されているものと一致している。彼は1834年2月に彼女に会い、日記に「彼女は大柄で肌のきめの荒い若い女性であった……私はひどくがっかりした」と書いている。Greigは彼女の幼い頃の寡黙は育ちのよい女性の控え目な振る舞いのためだとしているが、彼自身の記述は、別の原因を示唆している。

この頃、Lady N. Byronは、MiddlesexのFordhookに住んでおり、最も親しい友人は故Miss Doyle, Miss Montgomery, Dr. Lushingtonの義姉Miss Carrであった。彼女は彼らと一緒に暮していた。（即ち、Miss Carr は、私がこれをしたためている今現在、Dr. Lushington家に住んでいた）。 この三人の御婦人たちは常時 Lady Byronと一緒にいて彼女を全面的にリードし、Adaが私に知らせてきたところによると、Lady Byronに対して極めて不適切なわがままを通し、母と娘の間に最も不当なやり方で干渉するとのことであった。このことに大変悩まされたAdaは彼女たちに復讐の女神と仇名をつけていた。問題の御婦人たちは若さ溢れる時はとっくに過ぎ、三人ともお世辞にも美しいとはいえなかった。

Adaが成長するにつれて、この三人の御婦人の干渉にだんだん耐えられなくなってきたが、それに抵抗しようとする試みはことごとくLady Byronによってはねつけられた。私の家族がLady Byron母娘と知り合いになる少し前にLady Byronは娘の学問に助力してくれる身分のあまり高くない友人の息子を、毎日数時間雇っていた。予想されたようにすぐにこの若い二人の間に優しい感情が生まれた。最初のうちはLadyByronも三人の友人も気づかなかったが、Adaは学問に集中しないで若い教師とおしゃべりをしていると叱責された。彼女はこれを全く意に介さなかったため、ある時「復讐の女神」の一人に部屋から出るように命じられた。彼女は大変憤慨して不承不承に部屋から出ていった。二、三分して戻ってきた彼女は、本を何冊か持っていくようなふりをして、ある離れ屋で真夜中に密会の約束をする一枚の紙を若者にうまく手渡した。

密会は実行に移され、ことは行けるところまで進んだのだが実際には何もなく終わったとAdaは知らせてきた。この話にでてくる青年はAdaによれば、ごく普通の人であったと思われる。

Greigの草案には先に引用した最後の段落の"without"という語の後にカラット（Λ挿入の印）があり"complete penetration"という語がその行の上にあり、軽く消されている。おそらく彼はそのような詳細さは、予想される読者には確かなる情報だと思わすのに充分だと考えたのであろうが、すでにこの出来事の全体の感じが品位に欠けると思い始めていた。Victoria時代の紳士の、性的誘惑を完成させる機会がありながらもそれを控えた男に対する尊敬と軽蔑の入り混じった気持ちを伝えている最後の文は、彼の話の流れの中に割り込ませて内情に立ち入る型の表現の最初のものである。この機知に富んだコメントの後、彼の話はこんな風に展開する。

この後、この青年に対するAdaの感情はコントロールできないほど強くなった。ついには母親も気がつくこととなり、青年の訪問も止めにされた。「復讐の女神」の行動に失望し、憤慨して狂気にかられたAdaは母の家から逃れて、青年の親戚筋でLady Bの身分の低い友人宅で、あまり遠くないところに住んでいた恋人の腕に飛び込んだ。彼等は狼狽して彼女を迎えたが、この突飛な行動が知られないうちに最も早い機会をとらえてAdaを母のもとへ帰した。この件はもみ消され、母親と友人達以外にそれを知っているのは、Adaから知らされた私とLovelace卿だけで、彼はLady Bから彼らの結婚前にその事実を伝えられた。どの程度、Lady B'が事情を知っていたのか、どの程度Lovelace卿に伝えたのか私は知らない。しかし二人とも全てのことは知らなかったのではないかと思われる。

この奇妙な記述が、一体、いつ、誰のために、どんな目的で準備されたのかは、推測することしかできない。AdaとGreigの間に交わされた現存する書簡からすると、1840年代の中頃より前には、このような告白はされてないように思われる。資料の内的な証拠からすると、彼の記述はAdaの死後まもなくの1850年代に書かれたようだ。言いかえると彼がこの話を聞いて10年も経たないうちにということになる。この回想録の別の箇所に、彼女を知った最初の頃の思い出をあまり多く書き留めなかったことを後悔していると表現していることを考えると、このことについてはメモを取ってさえいたことを示唆している。いずれにせよ、彼自身の性格について多くを明らかにしている記述と同様、Adaと"Lady B."についての媚びない記述から、彼が自分の説明を率直で完全なものにしようとしたことは明白である。

この同じ事件について、その40年以上も経ってから書かれたMr. Frendの娘Sophia De Morganのもう一つの説明については、Greigと同様のことはいえない。Mrs. De Morganは

Lady Byronと自分との友情の親密さを強調して次のように述べている。

Stoke Newingtonの私達の住まいに、Lady Byronが14才位の娘を連れて訪問した後、私はLady Byronによりよく会うようになり、1832年にはFordhookのLady Byronに会いに行き一緒に過ごした…。私は次第にLady Byronの娘への不安を知るようになり、一、二度はMiss B.のわがままと軽率な言動による結果を私の力で防いだこともあった。私はこれ以上このことは触れる必要はないと思う。私はあの時実際には非行はなかったと願っており、スキャンダルが広まるのも防ぐことができたが、父Byron卿の特徴の多くを受け継いでいるByronの娘がまた父の性癖をも受け継いでいることは極めてはっきりしていた。……前にも述べたようにこれらのことが起ったのはMiss Byronがわずか14才か15才の頃であり全く軽率な行為だったと思う。

ここでMrs. De Morganの記憶は明らかに間違っている。Adaが駆落ちをしようとした時に、14才か15才であるはずはない。なぜならその年齢では彼女はあおむけに寝ているか松葉杖を使っており、また彼女も母もFordhookにはまだ住んでおらず、そこへは1832年に移ったのであった。にもかかわらず彼女はまちがいなく性的行動を暗示する「実際の非行」はなかったものと願っていて、Greigと同じ出来事について言及していると思われる。さて当時はMrs. De Morgan、つまり、当時のMiss FrendがByronの近親相姦についてはLady Byronの相談相手の一人であったことが重要である。彼女のここで述べていることは、当時まさにこの点について証拠集めに忙しかったLady Byronの孫息子の要請で書かれたものであった。その後、彼女はLady Byronの本当に親しい人々の中には、入っていない。何年も経ってからの母からAdaに宛てたある手紙には、おそらくMrs. De MorganがAdaの恋愛問題に関して根深い悪意に満ちたゴシップを流していることがわかってから、彼女の詮索好きな質問を避けていると書かれている。したがって、彼女がAdaの駆落ちについて知り、その悪い結末を防ぐのに関わったかもしれないという事実は、彼女と父親がGreigのいう「身分のあまり高くない友人達」であったこと、そして、Adaの若い恋人が彼等と何らかの関わりがあったことを示しているのかもしれない。Frend家は、身分が低いとははっきり言えないにしても、まちがいなく中流階級であった。

いずれにせよ、Adaは家に連れもどされ傷つき、さらに、母、復讐の女神達、Sophia Frend、そしてLady Byronが自分の不安を話すことを好んだその他の人々から、多くの説教と叱責を受けたのであった。彼女の気持は少なくとも一時的に挫かれた。彼女はこれに懲りて控え目にし、自分の行ないを改めるつもりであると宣言した。しかしロンドンでの彼女の社交の世界は自由への新しい可能性を展望できる新しいドアをすでに開いていたのだ。彼女は大人としての自立を十分に楽しむまで結婚はしないと宣言した。そしてこの時、既にCharles Babbageに出会っており、Greigによれば彼Babbageの影響は「結果的に彼女に大きな害を与えることになるのである。」

本稿は佐賀医科大学一般教育紀要第１９号の付章の日本語訳に続く、Dorothy Stein著 *Ada:A Life and a Legacy* (MIT Press paperback版、1987)の第一章 *"I Understand, Mamma"* (pp.1-37) の日本語訳である。

Ada の人格形成に多大な影響を与えた母、Byron伯爵夫人の生い立ちから結婚、出産、夫との離別の過程が詳述されている。一人の女性の生き方を通して、Victoria朝時代の貴族の結婚、教育、子育てについて、具体的に知ることができる。後半の部分では、著者はByron伯爵夫人をFlorence Nightingaleなどと共に、１９世紀において、病弱であったが故に普通の女性に課されていた家庭の仕事を免除され、読書などで視野を広げ偉大な仕事をなしとげた女性の一人として捉えていることは興味ぶかい。また、当時の医学、治療法がどのようなものであったか、また、骨相学についての言及は医学、看護学に関心をもつ者にとって示唆を与えうると思われる。

Ada が母親からの自立をどのように獲得していったのかについては、いくつかのエピソードを通じて書かれており、個性の強い母娘の葛藤は、現代にもあてはまる普遍的なテーマである。